

# アウグスティヌス『三位一体論』

## における理解概念の両義性

富松保文

### 序

アウグスティヌスは『三位一体論』<sup>1)</sup> 15巻で次のように言っている。「私は、たとえそれについて考えていないとしても我々が知っているものすべてを記憶に帰し、他方、思考の形づけを、本来的なある仕方、理解に帰したのである。なぜなら、真として見出したものを考えるとき、我々は殊にそれを理解していると言われるからであり、我々はそれを再び記憶のうちに寄託しておく。しかし、我々が考えるときはじめてそれを見出したのは、我々の記憶のより隠蔽されたかの深みにおいてであり、そこにおいて最も内密な言葉が生れるのであり、その言葉はいかなる国語にも属しておらず、いわば、知からの知、視からの視、すでに記憶の中にあったが、潜んでいた理解からの、思考のうちに現れる理解なのである」( *De trin.* XV, 21, 40.)。

本研究の課題は、最後の一節にある「すでに記憶の中にあったが、潜んでいた理解」と、「思考のうちに現れる理解」との関係を明らかにすることにある。引用冒頭の一文から窺えるように、本来的に理解 *intelligentia* と言われるのは後者であり、理解とは「思考の形づけ *informatio cogitationis*」、言い換えれば、形成された思考 *cogitatio formata* である<sup>2)</sup>。他方、考えられる以前にも記憶の中にあったとされる前者は、「それについて考えていないとしても知っている」もの、あるいはまさにそういう仕方、知ることだとと言える。この限りで、両者の違いは、知る (知っている) *nosse* ことと、考える *cogitare* ことの違いとして捉え直すことができるだろう<sup>3)</sup>。また、ここで両者の区別が、まさに言葉が生じる場面で語られていることに注目したい。記憶の中に潜んでいた理解が思考のうちに現れ出るとき、言い換えれば、知っていたが考えられていなかったものが考えられるとき、言葉が生じる。あるいはむしろ、言

葉とは、そうして現れ出た理解、知から形成された思考そのものに他ならない。それゆえ両者の関係を問うことは、逆に、理解および思考という観点から言葉を捉える試みでもあるとも言えるだろう。

以下、本研究では、理解に関する両概念が切り結ぶ場として、特に「考える」ということに注目し、そこから、『三位一体論』における理解概念のこの両義性が、用語上の不統一に由来する語の曖昧さではなく、理解という事柄自体に基づいているということを明らかにしたい。

## I 知っていることと考えること

アウグスティヌスは知る（知っている）ことと、考える（考えている）こととはっきりと区別している。例として14巻7章では、音楽にも幾何学にも詳しい人が挙げられ、彼がいま幾何学のことを考えているからといって、音楽のことを知らないわけではないと言われる（*De trin.* XIV, 7, 9.）。この区別はなんら奇異なものではない。今現にそのことを考えていないにしても、そのことを知らないわけではない。では、この区別はどう解されるべきだろうか。潜在的か顕在的かの違いだと答えることはやさしい。しかしそう言うだけでは、ただ問題を先送りするにすぎない。潜在的・顕在的とはどういうことなのか。ここで批判のためのモデルとして次のような説明図式を想定してみよう。アウグスティヌス自身の言い方にもあるように、まず、記憶の中に様々な知が蓄えられている。われわれがそれらについて考えていないときにも、つまり、意識されていないときにも、それらは記憶の中にある。これが潜在的だということである。そして考えるとは、それらの知を意識の表層にもたらすことである。考えるとは、あたかも様々な知が詰まった暗い記憶の倉の中を、懐中電灯を持ってうろつくようなものであり、暗闇の中にあるものを照し出すという意味では、それは顕在化することであり、照し出された限りのものでしか考えられないという意味では、顕在的である。こうした説明図式を、かりにいま「捜し物モデル」と呼ぶことにしよう。以下の課題はまさにこのモデルを批判することにある。

まず、「捜し物モデル」を支えるものとして、次の二重の考え方を指摘することができるだろう。第一に、捜し物に際しては、何を捜すのかがあらかじめ分かっているとはならない。捜しているものが捜し物に方向を与え、捜し物の途中で出くわす様々な掘出し物を選別する規準になる。第二に、見つかったものは、それを捜し出す前か

ら、すでにそこにあるものである。はじめからないものはいくら捜しても見つからない。第二の点から見ていくことにしよう。

先に触れた幾何学と音楽の例の後、アウグスティヌスはこう述べている。「この例から次のことが明らかにされる。すなわち、我々の精神の隠れたところに、ある事柄についてのある知があり、それが考えられるとき、ある仕方で見え出し、精神の眼差しのうちに、いわばよりはっきりと据えられるということである」(*De trin.* XIV, 7, 9.)。述べられていることは明白だ。まず知があり、次いで考えるという営みがある。ではここから、アウグスティヌスは「捜し物モデル」を採っていたのだと結論すべきだろうか。しかし私の考えでは、これはあくまで後から再構成された説明の順序にすぎず、ここに「すでに」という時間性が二重に働いているということを見逃してはならない。まず第一に、「すでに」考えることは終っている。言い換えれば、捜し物は見つかり、「すでに」捜し物は終わったのである。第二に、見つかったものは、捜す前から「すでに」そこにあったものである。この二つの点から順序を再構成すれば、まず、知があり、それを捜す、それを考えるということになるだろう。より先にあったものを先なるものとして説明する。この説明のどこがおかしいのか。問題は、考えるという営みのなかで、われわれが実際に立ちうる「今」はどこなのかという点にある。先の説明では、どの時点にも「今」があり、それゆえいかなる時点からも本当の意味での「今」は消えてしまっている。逆に言えば、時間の推移に相即して「今」があるゆえに、もはや「今」しかないのである。まず知がある。次いで考える。どちらも「今」ならば、知が考えることの先立つのは、ただ前者が時間軸上で後者に先立っているからにすぎない。これに対し、「すでに」というこの時間性を考慮に入れるならば、「今」を時間軸の任意の点に取ることはできなくなる。「今」は、捜し物が終わった時点、捜し物が見つかった時点にしか、つまり、考えるときにしかない。これを「今」としてはじめて、知は「すでに」あったものとして見出されるのである。たとえ知が考えることに先立っているにしても、考える以前の「今」においては、果たしてそういう知をもっているのかどうか分からない。知らないわけではないだろう。なぜなら、次の瞬間の「今」、私はそれを考えることができるのだから。しかし、知っていると言えるのはまさにそれを考えたときである。それゆえ、知っているというよりむしろ、知っていたと言った方がよいのかもしれない。言葉遣いはともあれ、知っている、知が先立っているということは、まさに考える「今」において、「すでに」という時間性を伴って見出され

るものに他ならず、「捜し物モデル」の欠点とは、まさにこの点を見落したことにあ  
る。「捜し物モデル」は、第一の「すでに」において時間軸から身を引くことによっ  
て、「今」を見失ってしまったのである。

第一の点に移ろう。捜し物をするためには、あらかじめ何を捜すのかが分かってい  
なくてはならない。しかし、もしここで言う「分かっている」ということが明白な理  
解であるならば、もはや捜す必要はないだろう。「分かっている」ということにおい  
て、すでに捜し物は終わっている。では、これを冒頭に引いた一節にある「すでに記憶  
の中にあったが、潜んでいた理解」と解すべきだろうか。しかしそうだとすると、す  
でに上で述べたように、この「すでにあったが、潜んでいたもの」は、まさに「今」  
において見出されたものとして理解されなくてはならないだろう。これに対して、明  
白な理解がありながら、なお捜し物をしなければならないような場合として、次の様  
な場合があると言われるかもしれない。これは、先に触れた幾何学と音楽の例のすぐ  
後に、アウグスティヌス自身が挙げている例である。「要するに、思い出させる人が、  
思い出させる相手にこう言うのは正しい。君はこのことを知っている。しかし君は自  
分がそれを知っているのを知らない。思い出させてあげよう。そうすれば、君は自分  
が知らないと思っていたことを知っていることが分かるだろう」(*De trin.* XIV, 7,  
9.)。まず、相手の言うことを理解し、その事柄が自分のうちにあるかどうか捜す。あ  
れば知っていたのであり、なければ知らなかった。この議論が受入れられないことは  
容易に認められるだろう。相手の言うことを理解し、それを自分のうちに捜すという  
二つの段階はここにはない。相手の言うことを理解できた時点で、私はそれを見出し  
たのである。しかし、言葉の理解という問題が出てきたこの時点で、章を改め、次に  
言葉と思考の関係について考察することにしたい。

## II 語ることと考えること

アウグスティヌスは、音声や文字に表される外的な言葉と、沈黙のうちに心の中で  
思われる内的な言葉を区別する。冒頭の引用文にある「最も内密な言葉」とは、内的  
な言葉のことだと理解されてよい。外的な言葉は内的な言葉の記号 *signum* であると  
言われる (*De trin.* XV, 11, 20.)。すなわち、外的な言葉は内的な言葉を意味表示  
*significare* するのであり、決して二種類の言葉があるわけではない。ある言葉を聞く  
とき、われわれはそれをたんなる音の連なりとしてではなく、言葉として聞く。つま

り、それらの音が何を言わんとしているのかを理解するのであり、同様に、言葉を語るときも、何かを言わんとして語るなのであり、内的な言葉とは、この何かに他ならない。

しかし、と「捜し物モデル」は反論するかもしれない。内的な言葉は最初のものではない。考えることに知が先立っているように、内的な言葉も、それに先立つ知を語り出しているのである。アウグスティヌスはこう言っている。「われわれが真実を語る時、つまり、われわれが知っていることを語り出すとき、われわれが記憶によって保持している知そのものから言葉が生まれるのは必然的である。その言葉は、その言葉がそこから生まれる知とまったく同じものである。われわれが知っているものから形成された思考は、われわれが心において語る言葉である」(*De trin.* XV, 10, 19.)。ここで、二つの点に注目したい。一つは、知から生れた言葉が、その知と同じであるという点であり、いま一つは、形成された思考が言葉であるという点である。第二の点から見ていこう。

ここでは「形成された思考」という言い方がされている。しかし別の箇所では、「思考によって形成されるもの」(*De trin.* XIV, 3, 5.)、「言葉は思考によって形成される」(*De trin.* XIV, 10, 13.)という言い方が見られる。では、思考は形成されたものなのか、それとも思考によって形成が行なわれるのか。形成に関する思考のこの両義性は、同時に言葉に関しても見られるものであり、先の引用中の「形成された思考は、われわれが心において語る言葉である」に対し、「思考によって語られる」(*De trin.* XV, 15, 25.)という言い方がされている。この両義性を整合的に理解するために、かりにいま、「形成された思考」を「考え」、「思考によって」という場合の思考を「考えること」と呼び分けることにしよう。そうすると、「考え」は「言葉」に、「考えること」は「語ること」に対応していると言えるだろう。言葉が語られ、考えが考えられる。同時に、考えが語られ、言葉が考えられる。考えることが、すでにどこかにある考えのたんなる表出ではないように、語ることも、出来合いの何かの表出ではない。考えることは考えを、語ることは言葉を形成する。無から、ではない。すでに記憶の中にある知から、である。では、形成とは、この知の表出ではないのか。

知から生れた言葉は知と同じであると言われていた。問題は、この「同じ」ということをどう理解するかにある。言葉がそこから形成される知は、同時に言葉がそこへと向うものでもある。「この形成されうるがまだ形成されていないものとは、われわれ

の精神のあるものでなければ、何であろうか。すなわち、見いだされ、思いつかれるままに、あれこれとわれわれによって考えられるとき、われわれがある種の回轉的な運動によってあちこちに向けるものでないとすれば何であろうか。私がいま、われわれがある種の回轉的な運動によって向けるといったものが、われわれが知っているものに到達し、そこからそのまっつき類似を捉えつつ形成されるとき真の言葉が生じるのである」(De trin. XV, 15, 25.)。出発点と到達点は同じである。この等しさは、外から見比べて得られるものではない。見比べるためには、両方を同じ舞台に引出さなくてはならない。しかし、出発点としての知は、記憶の奥に潜んでいる。同様に、類似を捉えるということも、向こうに知をモデルとして置き、それに似たものを言葉に刻むのではない。何かについて考え、それを確かに理解したとを感じる。確かに理解したと言えるのは、どこかにすでにある解答集のなかに一致する答えを見出したからではない。その理解は、それが「分かった」ということ以外のどこにもその支えを持たない。本当に分かったかどうかを判定するための参照項はない。ちょうど見えている色が、見えているその通りの色であると同様に——それが何色と呼ばれるかについては、色彩表を参照するにしても——分かったことはその通り分かったのである。なぜ他の理解ではなくこの理解なのかと問われれば、まさにこの理解においてしっくりきたからだとしか答えようがない<sup>4)</sup>。なぜ別様にはではなく、このように見えるのか。この見えが、そのものの見えとして一番しっくりくるからである。ではなぜ、それがしっくりくるのか。分からない。その見え、その理解がしっくりくるように、なぜかしら私の感覚、私の心はできている。そのようにできているということで、そうした事柄についての知があったのだと言えるかもしれない。

### Ⅲ 結 び

以上から、理解の両義性という最初の課題に対して、次の様に答えることができるだろう。「すでに記憶の中にあったが、潜在していた理解」は、いま現に、私の心の隠されたどこかに「ある」のではない。否、あるのかもしれない。しかしそれが確かに「ある」と言えるためには、それについて考えなくてはならない。考えている今、それは「ある」。では、考えていなかったときにはなかったのか。否。それは、「あった」のだ。しかしこの「あった」ということは、考えていなかったそのときを今として、その時点においては「ある」と言い換えられるようなものではない。考えている

今、それが「ある」と言えるまさにその時点で、それは「あった」と認められる。すなわち、「既に記憶の中にあったが、潜んでいた理解」と「思考のうちに現れる理解」とは、互いに見比べられるような二つの理解ではなく、考えて分かったという一つのことの裏表なのである。そして、「本来的には」後者が理解であると言われるのは、前者が後者においてはじめて見出されるものであるからに他ならない。

### 註

- 1) 以下、アウグスティヌスからの引用はすべて、*Bibliothèque Augustinienne, Oeuvres de Saint Augustin*, vol. 16, Desclée de Bruower. 1955. による。
- 2) “informatio cogitationis” “cogitatio formata” と同様の使い方として、11巻では visio が、“informatio sensus” (*De trin.* XI, 2, 3.) “sensus formatus” (*De trin.* XI, 2, 2) と言われている。“cogitatio formata” については本文Ⅱ節以下を参照。
- 3) ここで、この理解概念の両義性、および知ること nosse と考えること cogitare の区別について、代表的と思われる諸家の見解を簡単に見ておきたい。

M. Schmaus (*Die psychologische Trinitätslehre des Heiligen Augustinus*, Aschendorfsche Verlagsbuchhandlung, Münster Westfalen, 1966) は、nosse を “habituelle Erkennen”, cogitare を “aktuelle Denken” であるとし (p. 251), また、理解概念の両義性については、無意識的か意識的かという問い立ての上で、アウグスティヌスは最終的には意識的なものとしての理解概念の方に優位を認めている (pp. 266-272)。

P. Agaesse (*Bibliothèque Augustinienne, Oeuvres de Saint Augustin*, vol. 16, Desclée de Bruower. 1955, notes complementaires) によれば、少なくとも 10 巻以降では、nosse はつねに “connaissance implicite” あるいは “connaissance inconsciente” の意味で用いられている。一方、cogitare は、まず語源的には、“cogo” に由来し、そこから、“l'acte par lequele l'ame rassemble les connaissances éparses et latentes dans la mémoire...” を意味する。これは、『告白』X, 11, 18. におけるアウグスティヌス自身の説明によるものである。P. Agaesse はさらに、『三位一体論』の場合、cogitare を “reflexion”, よりふざわしくは、“re-connaissance” であるとしている (pp. 605-606)。

高橋亘 (『聖アウグスチヌス「三位一体論」に於ける Imago Dei』『聖アウグスチヌス研究』上智大学編 創文社 昭和三十年) は M. Schmaus に依拠しつつ nosse と cogitare を「意識されている」と「意識されていない」によって区別している (53頁)。また、cogitare が cogo に由来しているという『告白』におけるアウグスティヌスの説明に基づいて、次のように述べている。「メモリアの中には前述の如く、

種々な表象がいわば貯えられている。其の或るものは意識面に近く存在し、又他のものは奥の方の隅に殆ど忘れ去られた様にして存在する。cogitare とはかかる種々の表象を再び把握して集め、意識へもたらすことである」(48頁)。

これらの見解に対して私がここで問題にしたいのは、そもそも意識的・無意識的、潜在的・顕在的とはどういうことなのかということであり、言い換えれば、理解は、意識的なか無意識的なのか、潜在的なのか顕在的なのかと二者択一的に問うのではなく、そうした二者択一的な問い方そのものを無効にするような視点を、理解概念の両義性のうちに見出すことにある。

- 4) この「しっくりくる」という表現は、例えば9巻で「言葉は、考え出されたものが気に入るときに生れる」(*De trin.* IX, 8, 13.)と言われるときの、「気に入る」*placet* という事態を念頭においたものである。